

今、地域のきずなを支えられて

（老々介助をクリアして）

宮井 和子

久しく親子三人暮らしだったが、父は七〇歳で母を遺して逝った。母六十二歳、その時は私は友人と語らって新しく事業を起すべく準備中であつたので、母を一人置いて夜遅くまで家に帰れないことが多かつた。そこで何とかしなければと考えた末、父の遺した郊外の一戸建の家を処分し、仕事場に近い都心のマンションに引越すことにした。新居は、母に何かあつたとき、車で二十分以内に帰宅できる所という条件で……。そして幸いピタリのそれが見つかつたが、母にとっては初めての集合住宅経験であつたので、果たしてうまく順応できるかどうか、今ひとつの問題点であつた。しかしこれが意外、鍵一つでホイホイと外出できる気安さが気に入つたらしく、まずは成功であつた。

ところが、入居して四、五年経つたとき、とんでもないことが起きた。いつものように

遅く帰った私が扉を開けようとすると、中から母の声。「驚ろかないで」と……。鍵を回す間もどかしくドアを開けてビックリ、上がりガマチに母が倒れていたのである。後で聞いたところによると、母は、まだ半乾きであった洗濯物を室内で乾かそうとして乗った椅子の上で、足を踏みはずし転倒したという。そして老いてもろくなっていた母の足は、あえなく骨折、それでも母は帰ってきた娘が驚くからと、玄関まで這ってきて倒れ、そのままジツと私の帰るのを待っていたという。事故のあったのは六時ごろ、私の帰ったのが十一時、およそ五時間も倒れたままだったことになる。何はともあれ救急車を呼んで病院へ運んでもらったが、なんとも窮極の親不孝をしてしまったと、ひどく落ち込んだ。時に母八十五歳、これが私の老親介助生活の初ハードルであった。

それから、そんなことはたびたびあったが、かかりつけ医の助けや、居宅サービスの方々の助けを借り、何とかクリアし、切り抜けてきた。しかし、それでよいと思っていたわけではない。毎年少しずつ重度を増しつつある母の老令化にビクつきながら、そろそろ本格的な介護施設入りを視野に入れて、そのへんの情報収集に努めていたが、事態はいやおうなく切迫していた。

介護施設は？

そんなとき学生時代の友人から同級だったAさんが、ケアつき施設に入居したので見舞いと誘われた。そこで懸案の施設見学を兼ねて尋ねることにした。

そこは、ある程度予想していたものの、最寄駅（それすらもかなり遠い……）から歩いて二、三十分という距離。見渡す限りの田園風景の中を、やっと辿りついてびっくり……。忽然と現れたそれは、超モダンな近代的建物であった。中に入ると、広々としたロビー、大きなウインドウ、上等そうなじゅうたん、などなど……。

フロントに申し出ると間もなく友は車椅子に乘せられて運ばれてきた。血色もよく、衣服もキチンと、優雅なものごしで、にこやかに私たちにあいさつをした。しかし、どうやら私たちがダレであるか、判然としないような不安な様子も見せて……。次に案内された個室は、老人が一人過すには事足りるスペースと調度、どれも文句のないしつらえである。でも……何か足りない——何？と言われても明確に言い表わせないのであるが……、強いて言えば生活の匂いとでも言ったもの……が感じられないのである。それは当り前、今ここで人は生活していないのだから……と納得して再びロビーへ戻り、あまりは

ずまぬ会話を交わし辞去した。

そして帰り道、二人とも会話なくただ黙々と、「生きる」ことの大変さを宿題に……。

友を介護付居宅に訪れて間もなく冬の終りのある日、母は突然逝った。ある朝日覚め、隣に寝ている母のベッドに手を差し入れると、母は黙ってひんやりと返してきた。この数年間、考えても考えても答えの出ない問題を、何度もくり返し自問してきたというのに、このあつけなさはいったい何なのだ。最後ならもう少し私をあわてさせたり、くやしがらせたり、わめかせたり、そういう芝居もどきの終わり方があっても……なんて勝手なことを思っただぐらいであった。

でも、こうして一番気がかりだった母の最後は、○とは言わないが×でなく終った。そして、母を送る前に私が逝かなかったのが最大の親孝行だった、ということにしよう。

地域の支え

そんな私に、今度は間を置かず「一人暮らし」という大問題が待っていた。母は百歳を四か月残して逝ったので、当然遺った娘は七十八歳、煮るなど焼くなどご勝手に……と言

いたいところだが、そうもいくまい。

そんなある日、同じマンションのB夫人に声をかけられた。B夫人とは、これまで逢えばあいさつを交わす程度の間柄であったが、こうおっしゃった。「ペン習字を教えてくださいませんか」と……。驚いて「なぜ私に？」と聞き返すと、「(私の)母が亡ったときに掲示板に貼り出した手書きのあいさつ文を見て……」とのこと、「とんでもない」と固辞したが、「あまりハードルが高くないほうがいいのです。手の届く位のところを目指して……」と。今どきの若い人は率直で飾り気がない、思わずお人柄にひかれてズウズウしくも納得してしまった。希望者5名、月二回、夕食後八時から二時間、教室はメンバーのお一人C夫人宅、とトントンと話が決まった。5人共私の娘ぐらい、息子がいたらお嫁さんというところ。こうして善は急げと始まったが、予想どおり勉強会だか親睦会だか……。でも、私にとっては、これまで接する機会がほとんどなかった若い奥さんたちの考えや気質を知ることができて、大いに勉強になっている。

そして、すばらしいお負けまで……。なんと子供のいない私に曾孫ひいまたが出来たのである。つまりお嫁さんの一人にお孫さんができて、私は自動的に曾祖母ひいばあちゃんに昇格(?)した

という次第である。里帰りしてきた赤ちゃんのかわいいこと。もう少し大きくなったら、どんな手を使ってでも曾祖母のトリコにしてくれん……なあんて恐ろしい企みを抱いている私である。

玄関のブザーが鳴っている。ドアを開けるとお嫁さんCだ。「知人から送ってきたので」と、所の名物を持ってニッコリ。私はただもう、いつものとおりありがたくいただくのみ。

お嫁さんたちは「何かあったら何でも言ってください。だれかがお役に立ちますから……、そして「迷惑をかけると悪いとお思いかもしれないけれど、イザのとき連絡先もわからないほうが、もっと大ごとなんですから……」などとも言ってくれ。確かにそのとおり、中途半端な遠慮はかえって迷惑のもと、若い人達に教えられた。

こうして始めのうちはいささか腰が引けていた感のあった私も、いつの間にか垣根がとれて、けっこう軽口も飛び交う楽しい仲間になっている。でも、いい気になって慣れすぎてはなるまい。地域のきづなを大切に、と思えば思うほど感謝の気持ちとほどの礼節を忘れることなく、そして、自分でできることは可能な限り自力で……の心掛けを忘れずに……。